



Title	Nineteen Eighty-Four における Orwell 的反動
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	Osaka Literary Review. 1988, 27, p. 86-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25509
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Nineteen Eighty-Four における Orwell 的反動

伊勢芳夫

昨今の Gorbachev 政権下で進められている “perestroika” や “glasnost” といった一連の政策、中国共産党の開放政策、それに米ソの INF 交渉の締結といった世界情勢の趨勢は、*Animal Farm* や *Nineteen Eighty-Four* が米ソ二極分化した世界に映し出した悪夢をすでに過去のものにしてしまったのであろうか。Orwell の最後の小説のタイトルの 1984 年に当たる年以降、その小説の描いたビジョンの有効性を再検証する研究は少なくない。¹⁾ ただ、*Nineteen Eighty-Four* を前もって書かれた歴史書（予言書）として捉える時、現実の 1984 年以降の世界とはずいぶん掛け離れている。従って、作品の価値は半ば喪失してしまったと言えるだろうか。もっとも、Orwell 自身は、*Nineteen Eighty-Four* は予言（“will”）としてではなく、可能性（“could”）を示したものとして書かれたのであり、それゆえ、特殊な現象ではなく、普遍的真実を描こうとしたのであると言っている。²⁾ また、“Why I write”において *Animal Farm* は、“the first book in which I tried, with full consciousness of what I was doing, to fuse political purpose and artistic purpose into one whole” と述べている。³⁾ よって以下において *Nineteen Eighty-Four* を中心に、その普遍的意義及び芸術的価値について考察していくこととする。

1

Bernard Crick は、*Nineteen Eighty-Four* は極めて複雑な（“not straight”）な作品であり、それゆえ、様々な解釈がなされてきたという。Crick によるとその解釈は、

as a deterministic prophecy, as a conditional projection, as a humanistic satire of events, as religious allegory, as nihilistic misanthropy, as a total rejection of socialism, and as a liberatarian-socialist—almost anarchist—protest against totalitarian tendencies both in his own and in any other society.⁴⁾

しかしながら、Crick は *Nineteen Eighty-Four* が、このような多様な解釈を生み出すことを認めながらも、“he should have guarded against such misunderstandings and unwanted friends by practising what he always preached so well: unequivocal clarity of meaning in the text” といっているところから、⁵⁾ 彼は基本的にはそのような複雑性・曖昧性をその小説の美質とは評価しようとはしていない。確かに Crick のいうように作品の置かれている文脈を知ることは、作品の本当の意味を理解するには役立つであろうが、しかし、作品が読者に最初に与える印象こそが、作品構造そのものの忠実な反映ではないだろうか。作品の時代背景や他の作品に対する知識は、制作動機を理解するのに役立っても、作品そのものの構造を知るのには役立たない。もし仮りに Orwell が全体主義に対するヒューマニスチックな警告の書を書くつもりで *Nineteen Eighty-Four* を書いたとして、政治パンフレットの形式を執らず小説形式を採用した結果、その形式のもつ本質的な曖昧さから、様々な読者から様々な解釈を許したとしても、それは作者の意図をうまく伝えることが出来なかった未完成な作品と見なすよりも、いわばロールシャハテスト的——恣意的であるが、必ずしも根拠がないわけではない——多様な解釈を許容する作品であると捉える方がより建設的である。小説作品の芸術的価値は、もっともらしい教訓を伝えているかどうかではなく、読者に与える精神的衝撃力の強弱によって測られるべきである。

Orwell の小説の構造に関しては、Zwerdling が非常に示唆に富む分析をしている。彼によると、Orwell の作品（小説以外のものも含めて）には、客観的描写と、個人的意見が渾然一体とならず、それが相殺するような関

係で作品を構成しているというのである。⁶⁾

明らかにその傾向は Orwell のほとんどすべての作品において顕著にみられる。例えば、*Down and Out in Paris and London*において、非常に観察力の鋭い浮浪者たちの描写が続いた後、突如、青年っぽい社会主义思想を標榜する作者の肉声が闖入して、作品を浅薄なものにしてしまっている。⁷⁾

しかしながら Zwerdling も指摘するように、*Nineteen Eighty-Four* は Orwell の1930年代のリアリズム小説とは違って、たとえ作品の真中で Emmanuel Goldstein の *The Theory and Practice of Oligarchical Collectivism* からの抜粋が長々と挿入されていたり、小説の末尾に “Appendix” という形で作者自身の Newspeak についての解説が付加されているといった、いわば Sterne 流の極めて突飛な構成であっても許容される空想小説の形式をとっているのである。つまり、*Nineteen Eighty-Four* は、SF 乃至はスパイ小説の枠組を借りることによって、一貫した基調の厳格な保持を強制されないので、様々な要素を混在させることが出来るのである。

2

すでに、*Nineteen Eighty-Four* が様々に相矛盾する解釈を引き起こしてきたことは指摘した。では果して、それぞれの解釈が単に解釈者の恣意や誤解などではなく、テキスト内にその正当な根拠をもっているのかどうかを、まず最初に作品の展開に則して分析する必要があるだろう。

Nineteen Eighty-Four の紛糾する解釈は、次に挙げる相反する三組の主張に集約することで、ほぼ全体をカバーできるであろう。すなわち、*Nineteen Eighty-Four* は、

- i) 悲観的で運命論的な予言の書であるというのに対して、全体主義傾向に対するヒューマニスチックな警告の書であるという見方。
- ii) 反社会主义的であるというのに対して、社会主义を否定するものではないという見方。
- iii) 男女の原初的愛の遵奉とその挫折を描いたのであるというのに対して、むしろ女性蔑視が顕れているという見方。

i)として挙げた悲観的で運命論的であるという解釈⁸⁾を支持する論拠を、作品の中に見つけることは容易である。というよりも、作品全体の基調そのものが、悲観的・運命論的であるといえる。もっとも telescreen や Newspeak といった SF 的・スパイ小説的道具立ての効果によるものではなく、全体主義国家 Oceania が、その国家基盤の最大の拠り所としている人間の残酷さの様々の具体的様相の、実にリアリスチックな描写が随所に発見出来るからである。The Two Minutes で見せる群衆の盲目的な怒り⁹⁾、少数者や社会的弱者に対する嫌悪や、また、子供の示す残酷性、従って人間が本質的に具えている残酷性について描かれる箇所は、卓越した観察力のルポルタージュ作家としての Orwell によってのみ可能な描写である。そして、その残酷性や盲目的怒りは、単に支配階級や党の信奉者にのみ見い出されるものではなく、主人公である Winston Smith もまた、しばしばその傾向にあるのを見い出されるのである。

一方、*Nineteen Eighty-Four* が、全体主義に対する警鐘であるという読み方は、この小説が全体主義国家 Oceania に対する反抗と挫折を描いたものであるところから、当然可能な解釈である。

ii)に挙げたこの小説に見られるという反社会主义的姿勢については、第 1 に Ingsoc とは、English Socialism の Newspeak による言い方であり、従って Oceania の独裁政党と英国社会主义との繋がりを明らかに示唆している。また、Goldstein の著者の抜粋の中にも、社会主义を批判的に記述しているところがあるところから (p. 332), 表面上は明らかに社会主义を批判していると受けとれる。一方、社会主义を否定するものではないという解釈の明白な論拠は、テキスト中にはほとんど発見出来ない。そこで一般には、Orwell 自身の “Socialism or on the British Labour Party (of which I am a supporter)” という彼が上記の解釈を否定した言葉を引いて¹⁰⁾、彼の社会主义との決別はなかったと主張する。しかし、小説作品と作者とをそのように短絡的に結びつけるべきではないので、ここではその伝記的資料を採用せずに、英国における既存の社会主义と Orwell の考えていた

それとの食い違いに注目することにする。Orwell にとっての社会主義とは、*The Lion and the Unicorn*における彼自身の定義を借りると “common ownership of the means of production’ is not in itself a sufficient definition of Socialism. One must also add the following: approximate equality of incomes (it need be no more than approximate), political democracy, and abolition of all hereditary privilege, especially in education”¹¹⁾ というものだ。ゆえに眞の社会主義革命とは、そのような社会的環境の建設をめざすものであり、それ以外のものは社会主義と呼ばれるのに値しないのである。しかし、*Nineteen Eighty-Four* で言及されている社会主義乃至革命は、建て前上 equality と freedom を標榜しながら、眞の目的は権力奪取なのである。それに、作品において批判されているのは、眞の自由・平等を達成しようとする社会主義に対してではなく、この虚偽の社会主義や社会主義者に対してなのである。そういう意味で Orwell は反社会主義ではなくて、内部告発者だと Zwerdling は言うのである。¹²⁾

三番目に挙げた Winston と Julia との愛とその挫折という一般受けするテーマが、*Nineteen Eighty-Four* において重要な位置を占めていることは疑いの余地のないところである。というのも Winston が思想警察の中心人物である O’ Brien の責に抵抗する最後の拠り所としたのが、Julia との愛の絆であったからである。しかし、一方において、この作品に女性蔑視の傾向を見る研究者がいる。¹³⁾ 確かに、作品における女性の扱い方は、全体を通して類型的であり、Winston や O’ Brien のような個人として描かれずに、次のような四つの型に分類出来る。すなわち Winston の妻のように党への盲目的信奉者か、Parsons 婦人に代表される受難者か、娼婦か、Winston の母親のような献身的な母親かである。Julia と言えども例外ではなく、彼女は一見個としての人間として描かれているようで、その実不自然な程、無知と全知との両面性を持ち合わせ、それに娼婦のようでありながら、他方極めて無機的である。さながらスパイ小説のヒロインを思わせるところがあり、彼女の性格に一貫性や深みがあるとは言い難い。

3

以上のように、*Nineteen Eighty-Four* には相対立する要素が拮抗して共存しているが、しかしながら、このことだけでこの小説の複雑性が説明し尽せるわけではない。というのは、たとえ相対立する要素が等しい力関係を保って作品に共存しているといっても、その作品が置かれている文脈によって、両者の力関係が大きく変わることがあるからである。例えば、一つの作品において全体主義的傾向と自由主義的傾向が同じ力関係で顕われていたとしても、西洋自由主義社会において、それが読まれる時、無意識の選択が行なわれ、解釈は自由主義の側に傾くであろう。しかしながら、*Nineteen Eighty-Four* の作品構造はさらに複雑化されていて、ただ単に相対立する立場が描かれているだけではなく、同時にそのいずれの立場に対しても等しく否定的要素が加えられている結果、読者はその先入観によって作品を偏向的に読むことが困難になるわけである。

人間が本質的にもっている残酷性が、理想社会を建設する革命の試みを常に腐敗させるという *Nineteen Eighty-Four* に見られる悲観主義的宿命論は telescreen や Newspeak や変装といった SF 的スパイ小説的道具立てによってぼやかされている。人間の本質的な残酷さが、非現実でグロテスクなサディズムへと変質させられているのである。Orwell 自身 *Nineteen Eighty-Four* は予言ではなく、可能性を示したのだと言う時、一つには設定や道具立ての弱さを考慮したことであろう。もっとも一般に認識されていないか、或は公にするのを忌避している人間的真実を描こうとする場合、その真実を誇張して描くことを余儀無くされる。従って、必然的にその真実は歪曲される結果となる。ただ Orwell は、本来 Swift のような徹底した諷刺精神の持ち主ではなく、むしろ性善説を信じようとするところがあり、それで彼の作品は諷刺的というよりは教訓的色彩を帯びる傾向がある。

一方、ヒューマニスチックな立場を代表する筈の Winston Smith は、

本当にヒューマニスチックなのであろうか。第3章の拷問の場面にのみ注目する時、その拷問の激しさを考慮すれば、彼の変節に対して寛大にならざるをえないであろう。しかし、彼がロケット弾の爆発で梳がれた prole の腕を平然と溝に蹴り入れたり (p. 229), 党に反乱する過程においては子供の顔に硫酸をかけるのも辞さないと誓う (p. 305) 時、我々は彼の人間性に對して疑心暗鬼にならざるを得ない。明らかに Winston には Big Brother はともかくとして、O'Brien を愛する素地をもっていたことは間違いないであろう。

次に、*Nineteen Eighty-Four* が反社会主義小説かどうかに関しては、たとえそうであるにしても、しかしながらアメリカの保主主義者が反共の宣伝に使うというのは、作品全体を把握していないからであることは確かである。というのも、この小説は社会主義以上に資本主義批判をテーマにしているからである。すでに挙げた *the Lion and the Unicorn* のファシズムについての定義が “at any rate the German version, is a form of capitalism that borrows from Socialism just such futures as will make it efficient for war purposes”¹⁴⁾ であることからわかるように、Orwell にとって資本主義はファシズムの前段階なのである。Oceania において、確かに私有財産制は否定され、すべてが国有化されているという点においては社会主義的であっても、より強力な搾取の機能が働いている点で、資本主義より徹底した形態とみることが出来るのである。フロックコートを着て、シルクハットをかぶった19世紀的資本家を Oceania から排除することでさながら社会主義革命を達成したかのように民衆に錯覚させ (p. 218-9), その実、その本質的な権力志向の原理はより強固に保持されているのである。

そのような虚偽の社会主義に対して、Winston は proles に期待をかけている。千年後や一万年後には彼らによる真の社会主義革命が達成されることを希望する (p. 385)。しかし、O'Brien の proles による革命に対する冷笑を裏づけるように、作品において proles に期待を抱かせるような描写はほとんどなされていない。それは前作の *Animal Farm* においても同様

である。労働者階級の英雄的人物を暗示する馬の Boxer はまったくの無知であり、独裁者の Napoleon の策略を少しも理解出来ない。それどころか、反対に彼の最大の信奉者である。そして、おそらく、唯一 Napoleon 達の正体に感ずいているロバの Benjamin は、常に沈黙し、無関心な態度をとっている。これが *Nineteen Eighty-Four* の proles になると、クジや酒などにのみ関心を示し、過去のことなどほとんど忘れてしまっており、眞の革命など到底期待出来ない。

このように Orwell は、*Animal Farm* や *Nineteen Eighty-Four*において、救い難い程の無知で無気力に労働者を描いた為、彼は彼自身の社会主義国家ビジョンを空中楼閣にしてしまったといわざるをえない。確かに、人間的感情は proles にのみ見い出せるわけであるが、その感情も *Nineteen Eighty-Four*においては、母親の子に対する愛情だけに限られるのである。それはある意味で Winston の郷愁であって、決して未来に対する建設的な展望を期待させるものではない。

Winston と Julia との愛の問題については、一般に彼らの間の精神的つながりの欠如に言及されることは少ないが、彼らの関係が肉体に限定されていて、それは Winston と O' Brien の精神的つながりと対比されて描かれている。Julia は Winston が Goldstein の著書について、彼に語りかけることにはほとんど関心を示さない。また Winston も Julia を個人的に深く知ろうとしないし、O' Brien に対して感じるような敬意や共感を彼女に対して感じることはあまりない。

確かに彼らは心から裏切ることはないと言ふ (p. 300)。しかし、彼らがそういう時、普通その言葉から連想されるような愛の強さを意味するのではないのではないか。そうでなく、他人の不幸を望まないというような、いわば最大公約数的人類愛、或いは同胞愛のようなものをさしているのであろう。Winston は拷問を受けて Julia に不利なことを告白するが、彼はそれを心からしたのではないという (p. 345)。そして、心からではないがゆえに、彼はなお彼女を裏切ってないと主張する。このWinstonの

信念の前提には、おそらく Julia 以外の人間なら進んで裏切るだろうという彼の思いがあるに違いない。他のどんな人間でも進んで裏切れるのに、ただ Julia だけは不本意ながら裏切る、なぜなら彼女を心から愛しているからだというのである。これは奇妙な論理である。果してそれを愛と呼べるのであろうか。そもそも、特に愛していない人物であろうと、憎しみを感じていない相手に対して不幸を押しつけることは不本意なことであり、望んではやりはしないであろう。

つまり Winston は Julia を政治的に愛しているのであり (“a political act” p. 265), Julia との愛は彼にとって、党に抵抗する最後の砦であった。最初、Winston は過去に固執する。しかし、彼が過去を伝える物的証拠だと思っていたすべてのものが党によって与えられたものであった。彼が同志であると直観的に感じた O’ Brien は思想警察の幹部であり、Goldstein の著書も O’ Brien が書いたものであった。そうして、最後に残ったのは、Julia との愛の絆であったのだ。Julia を心から裏切らないというのが、彼に残された唯一の党への抵抗であったのである。しかしながら、彼は想像を絶する拷問の後、党に抵抗する気力を喪失した瞬間、Julia 自体を精神的に愛していたわけではなかったので、Winston は彼女を心から裏切ってしまったのである。

最後に *Nineteen Eighty-Four* における女性蔑視の傾向は、確かに類型的にしか女性が描かれていないところを見れば頷ける。しかし、*Burmese Days* や *A Clergyman’s Daughter* において問題になるようには問題にならない。というのは、*Nineteen Eighty-Four* そのものが、極めて歪な世界であり、そこに生きるほとんどすべての登場人物が、カリカチュア化されているからである。むしろ、その中で人間らしさを保持しているのは女性の方である。例えば、小説の最初の方で、爆撃で子供の腕がふっ飛びところが映画に映し出され、党員が歓声を上げた時、悲しみの叫びを上げたのは prole の女性一人であった (p. 163)。

4

これまで考察してきたことから *Nineteen Eighty-Four* は様々な要素が相対立して共存する小説であることが明らかになったであろう。そして、そのように unity に欠けるという点において、この小説の構造の弱さが指摘出来る。実際、構造の弱さということから、Orwell の小説家としての資質に疑問を抱く研究者もいる。確かに一般論としてはそうである。しかし、*Nineteen Eighty-Four* の世界においては、まさにその構成力の弱さ、unity の欠如が意想外に興味深い効果を作品にもたらしていることが観察出来るのである。

Orwell は政治を芸術作品とする意図でもって、彼の最後の 2 編の小説を書いたことはすでに触れた。20世紀の政治力学は、まさに集中化と拡散化に環元される。言い換えれば、異常な執着心で多様なものを単一なものへと収束していくというのが全体主義であり、中央集権化である。逆に、第 2 次世界大戦後の民主主義においては、そのような収束化を食い止め、画一性を否定し、いかに多様性を多様性のまま保持するかが重要な課題となっている。そして、反ファシズム、反体制的芸術というのは、常に非芸術的であり、伝統的規範の破壊である。

Nineteen Eighty-Four は、この収束し画一化しようとする絶大な権力と、それに抵抗する反権力との責め合いを描いたものである。Oceania における権力者達にとって、一つの固定した価値体系に基づくのではなく、それがいかなる価値体系であろうと、常に国家全体の unity の維持こそが最優先事柄なのである。そして、その unity を乱そうとする反体制分子を徹底的に抹殺しようとするのである。ただ、作品全体の枠組としての Winston の党への絶望的な反抗と破滅という話の筋は、これまでに考察してきたように、作品におけるすべての個々の要素を統括し unity を与えるほど強固な枠組では決してない。Winston を破滅させる過程で誇示された Ingsoc の絶大な権力は、みかけほどには作品世界全体には浸透していないのであ

る。むしろ、細分化された収束と発散との衝突とその膠着状態が、様々なレベルにおいて具象的に描かれたところが *Nineteen Eighty-Four* において画期的な点なのである。

Nineteen Eighty-Four は、共産主義や資本主義やカソリックといったある特定の価値体系をもつ全体主義化を問題にしているのではなく、それがどのようなイデオロギーや宗教を奉ずるにしろ、強大な全体主義国家体制とそれを阻止しようとする抵抗運動を描いたのである。Orwell が第二次世界大戦をすら英國における社会主義革命とだぶらせて考えようとしたことからも理解出来るように、ある収束化の流れに対して、いかなる手段を用いても、それを阻止しようとする試みが続けられなければ、全体主義は遂には我々を支配するのである。そして、*Animal Farm* に見られるように革命は一度だけでは不十分である。国家的規模で確立されつつあるものすべてのものに対して、永遠に抵抗をしなければ、全体主義の脅威から逃れることは出来ない。従ってある場合には、科学的進歩に対してデカダンスが必要になり、また保守化した社会主義には資本主義の力を借りなければならない。そういう意味において、革命に対する革命は、往々にして反動的色彩を帯びることになるのである。Winston が結局、敗北せざるを得なかったのは、Julia を心から裏切ったからというよりは、反抗の為の反抗を貫けなかったからであった。

Nineteen Eighty-Four は、主人公 Winston の抵抗によってというよりは、作品自体に内在する unity を破壊する作用によって、反全体主義小説と呼びえるのである。しかし、それは反面、人間本来のもっている安定や一貫性への志向と真向から対立する。つまり、*Nineteen Eighty-Four* が読者に与える不安は、この小説が攻撃する全体主義に対してと同様に、或いはそれ以上にその全体主義への作品自体が採用した攻撃手段そのものに対してでもあるのだ。

注

- 1) 例えば, Tom Winnifrith and William V. Whitehead, *1984 and All's Well?* (London: Macmillan Press, 1984) を見よ。
- 2) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters*, edited by Sonia Orwell and Ian Angus (Penguin Books), 4 vol. p. 564. 以下 *CEJL* と略記。
- 3) *CEJL*, 1 vol. p. 29.
- 4) Bernard Crick, "Introduction" in *Nineteen Eighty-Four* (Oxford: Clarendon Press, 1984), p. 4.
- 5) Bernard Crick, *George Orwell: A Life* (Penguin Books), p. 569.
- 6) Alex Zwerdling, *Orwell and the Left* (New Haven and London: Yale University Press, 1974), p. 149.
- 7) George Orwell, *Down and Out in Paris and London* (Penguin Books), p. 154.
- 8) 例えば, Isaac Deutscher, "1984—The Mysticism of Cruelty," in his *Heretics and Renegades* (Hamish Hamilton, London: 1955), p. 49 を見よ。
- 9) George Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (Oxford: Clarendon Press, 1984), pp. 164-70. 以下, 特に指示のない場合, *Nineteen Eighty-Four*への言及は頁数のみ本文に記入。
- 10) *CEJL*, 4 vol. p. 564.
- 11) *CEJL*, 2 vol. p. 101.
- 12) Zwerdling, *op. cit.*, pp. 36-7.
- 13) 例えば, Daphne Patai, *The Orwell Mystique: A Study in Male Ideology* (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1984) に詳細に分析されている。
- 14) *CEJL*, 2 vol. p. 101.